

好感度なスマイルとは (スマイルの客観的評価) ～歯科衛生士と一般人の間で差はあるか～

石橋弥生¹★, 花田晃治², 寺田員人³

¹明倫短期大学歯科衛生士学科専攻科口腔衛生学専攻第1回生, ²明倫短期大学,

³日本歯科大学新潟生命歯学部歯科矯正学

Objective Evaluation on Smile with Favorable Impressions

Yayoi Ishibashi¹, Kooji Hanada², and Kazuto Terada³

¹Department of Dental Hygiene & Welfare, Meirin College

²Meirin College

³Department of Orthodontics, School of Life Dentistry at Niigata, The Nippon Dental University

他者から見た好感度の高いスマイルとはどのようなものであり、歯科衛生士と一般人との間で差があるのかを検討した。スマイルの評価者として、グループ1：歯科医師または歯科衛生士、グループ2：一般人を表わす者として、専門基礎科目未履修の歯科衛生士学科1年生、グループ3：専門基礎科目既履修の歯科衛生士学科2年生、を設定した。

好感度の高いスマイルとは、口角が上がり、口が大きく開いた形で、口唇の色で青系統色が少ない。一元配置分散分析において、1枚のスライドに対してグループ間で有意差があったが、他のスライドについては、3グループ間で有意差は認められなかった。

キーワード：スマイル、客観的評価、好感度のスマイル

Keywords : Smile, Objective Evaluation, Favorable Impression

緒 言

現代社会はグローバル化とともに、一個人の生活の質 (QOL) の向上を求める傾向が強くなり、その一方で複雑な社会を生き抜くためには、良好な対人関係が重視されるようになってきている。人間相互において良好なコミュニケーションを構築・維持するために好感度の高いスマイルが大きな役割を果たしていると言われている。また、コミュニケーションの手段としては、言葉よりも言葉以外の要素のほうがより多くの情報を伝達することが指摘されている¹⁾。スマイルを伴う表情豊かな会話は人と人との

交流を円滑で豊かなものにする。

ところが、スマイルは日本人にとって苦手分野の一つのようであり、笑顔に自信のない女性の割合が一番多い国は日本であると言われている。また、日本人女性のスマイルの特徴であり、海外の女性には見られない口元を隠す仕草をする割合は多い²⁾。

歯科医療の現場において、歯科衛生士の好感度なスマイルは非常に大切であると考えられる。こうした行為によって患者の満足度が向上するのに伴って、院内イメージのアップに繋がると考える。このことは、院内の風土や雰囲気向上し、スタッフのモラルのアップにも繋がるであろう。

それでは、他者から見た好感度の高いスマイルと

★明倫短期大学歯科衛生士学科10回生、同専攻科口腔保健衛生学専攻1回生

原稿受付：2010年9月25日、受理 2010年11月30日

連絡先：〒950-2086 新潟市西区真砂3-16-10 明倫短期大学 花田晃治 TEL.025-232-6351 (内線105)

本論文は2010年2月、独立行政法人大学評価・学位授与機構の学士の学位授与の申請に係わる「学修成果・試験の審査」に合格したものである。

はどのようなスマイルであろうか。本研究は、歯科衛生士または歯科医師の資格を有する教員、附属歯科診療所の歯科衛生士、専攻科口腔保健衛生学専攻の学生からなるグループ1（歯科医療従事者からなるグループ）と、歯科衛生士の資格がなく、専門基礎科目をまだ履修していない歯科衛生士学科1年生からなるグループ2（一般人を表わすグループ）、歯科衛生士の資格がなく、専門基礎科目は履修したが、まだ臨床実習に出ていない歯科衛生士学科2年生からなるグループ3との間で、スマイルの評価に差が出るのかについてアンケートによる調査を行った。加えて、スマイル時に特徴が出ると考えられる口元、目、鼻、さらに肌・歯・唇の色との関連について探ることとした。

資料と方法

資料

本研究の資料は、新潟大学医歯学総合病院矯正科において実習中の明倫短期大学歯科衛生士学科3年生13名について、矯正科の写真室に設置してある顔面規格写真撮影装置を用い、スマイル時と真顔時の正面写真と側面写真を撮影した。なお、スマイルは自然なスマイルとした。

顔の正面写真の撮影は、撮影用カメラから被写体を固定するイヤードまでの距離を150cmに設定してある撮影用装置に、被験者を安静な状態で座らせ、イヤードで外耳道を固定し、被験者の法兰克福平面が床面と水平になるように頭位を固定した。撮影には、150mmのレンズを装着したカメラを用いた。照明は、カメラの左右の上方約60cmに固定した2台のストロボを使用し、35mm用スライドフィルムにて正面写真を撮影した³⁾。

顔の側面写真は、被験者固定用椅子を45°回転させ、顔の正面写真の撮影と同一条件で右側顔面を撮影した。

研究方法

1. 笑顔に対する評価者間の違いについて

1) 評価方法

被験者の顔面写真を、グループ1 34名、グループ2 59名、グループ3 68名に評価してもらった。

撮影した35mm用スライドフィルムから、プリンター（インクジェットプリンター PIXUS, Canon社製）を用いて15.8cm×10.6cmの写真にプリントし、それらをイメージスキャナーにてパソコンに取り込んだ。



図1. 顔の正面写真と側面写真 スライド11（個人情報保護のために写真をトレースしたものを載せた）

それぞれの写真を、高さ14.0cm、幅9.33cm、回転90°に設定し、PowerPoint2007（マイクロソフト社製）を用いてスライド（図1）を作成した。

1枚のスライド上に、正面観と側面観のスマイルの写真を並べ、40秒ずつ順次13枚を映写した。この

40秒の間で、次の10項目について各項目に示す形容詞(①~⑩)によって5段階で評価^{4,5)}してもらった。満点は50点となる。なお、前の人の子のスマイルの印象を残さないために、各スマイルのスライドの間に、黒いスライド(ブラインド)を5秒間映写した。

- ① 好ましい 5 4 3 2 1 好ましくない
 ② 良い 5 4 3 2 1 悪い
 ③ 十分な 5 4 3 2 1 不十分な
 ④ 満足な 5 4 3 2 1 不満足な
 ⑤ 正常な 5 4 3 2 1 異常な
 ⑥ 幸福な 5 4 3 2 1 不幸な
 ⑦ 素晴らしい 5 4 3 2 1 ひどい
 ⑧ 価値のある 5 4 3 2 1 価値のない
 ⑨ 魅力的な 5 4 3 2 1 魅力的でない
 ⑩ 美しい 5 4 3 2 1 醜い

評価者を一つの部屋に集めて同条件で、短時間でPowerPointを用いてアンケートを行うことができた。さらに、映写時間を一定に設定することで、評価に偏りがでないように考えた。

2) 評価者間の差

資料に対する評価者間の差を、前述した3グループ間について、一元配置分散分析を用いて調べた。

2. 笑顔に対する評価要素について

1) 顔についての計測項目

笑顔の評価に影響を与える要素として、顔の器官の大きさについて、計測項目を設定した。

顔の器官については、距離計測として9項目を設定した(図2)³⁾。

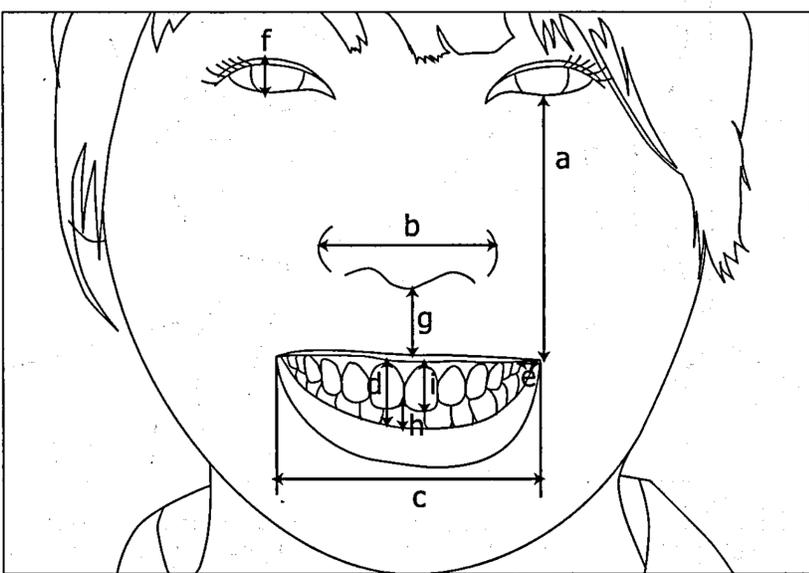


図2. 正面写真の計測項目

- a. 口角の高さ
 b. 鼻翼間の距離
 c. 口角間距離
 d. 上唇と下唇間距離
 e. 空隙の水平距離

- f. 目の上下幅
 g. 鼻と上唇間距離
 h. 上顎切歯切端から下唇までの距離
 i. 上顎切歯切端から上唇までの距離

2) 顔についての計測方法

撮影した写真を13.2cm×8.7cmの大きさにプリントアウトし、(実測長に対して高さでの縮小率は51%)上記の計測項目について、真顔と比べてスマイル時にどの程度変化するかについて、ノギスを用いて測定を行い、平均値を算出した。単位はmmとした。

3) 色についての計測方法

色に関する要素については、顔面皮膚の色を表わすものとして頬部の色、笑顔時に見える歯の色として、上顎中切歯の色、赤唇の色を要素とし、Adobe Photoshop 4.1LE (Adobe社製)にて、それぞれの部位の赤(R)、緑(G)、青(B)(各0~255)の色情報を抽出して、それぞれを計測値とした。

4) 笑顔に影響する因子について

前述した器官の大きさに関する9つの距離計測、3部位の色情報(R, G, B)に評価者群も要素に加えた19項目について、多変量解析を用いて、評価に影響する因子を抽出した。

得られた結果から、笑顔に影響する因子について検討した。

結 果

1. 笑顔の資料に対する評価者間の差について

スライド7の資料のみに3グループ間で危険率5%以下で有意差が認められたが、その他の評価資料については、3グループ間に有意差は認められなかった。この資料における3グループの平均評価点数は、グループ1 33.7点、グループ2 34.1点、グループ3 35.0点であった。

表1. スマイルの評価

	グループ1		グループ2		グループ3
	平均値		平均値		平均値
スライド11	41.558	スライド11	43.305	スライド11	41.411
スライド1	39.441	スライド2	39.694	スライド1	39.750
スライド2	38.558	スライド1	39.576	スライド2	37.852
スライド8	37.382	スライド3	39.389	スライド3	37.441
スライド3	36.647	スライド8	38.711	スライド8	36.132
スライド13	33.735	スライド5	36.016	スライド13	34.985
スライド5	33.176	スライド13	34.135	スライド5	34.161
スライド10	32.294	スライド7	34.000	スライド7	33.470
スライド12	31.088	スライド4	33.694	スライド4	31.514
スライド4	30.323	スライド10	29.932	スライド10	29.808
スライド7	29.029	スライド6	29.101	スライド6	28.426
スライド6	27.941	スライド12	28.322	スライド12	28.367
スライド9	26.205	スライド9	26.271	スライド9	25.338

アンケート結果を評価点数順に並べたものを表1に示す。

グループ1, 2, 3共に上位7人まで順位に多少違いはあるが、ほぼ同じ結果となった。下位では、グループ2, 3は同じ結果となったが、グループ1のみ順位に差が出た。

2. 真顔時とスマイル時の計測について

真顔時の計測結果を表2, スマイル時の計測結果を表3に示す。

表3で示すように、aは、平均22.4mmでスライド12が平均値に最も近かった。bは、平均15.9mmでスライド4が最も近かった。cは、平均24.0mmスライド7が最も近かった。dは、平均4.9mmでスライド1, 8, 10, 11が最も近かった。eは、平均1.5mmでスライド1, 3, 10, 13が最も近かった。fは、平均2.9mmでスライド2, 8, 9, 13で最も近かった。gは、平均4.4mmでスライド2, 3, 4, 6で最も近かった。hは、1.0mmでスライド8が最も近かった。iは、4.1mmでスライド13が最も近かった。

各数値の下には、真顔からスマイル時にどの程度変化したかを示した。a, f, gの測定項目は、すべての被験者で減少したが、b, cの測定項目では、すべての被験者で増加した。なお、↗は真顔時よりもスマイル時に増加、↘は真顔時よりもスマイル時に減少を示す。

3. 色の計測結果について

計測結果を表4に示す。

4. 笑顔に対する評価要素について

評価に影響する因子としては、

$$Y = -0.994 \times a + 1.671 \times c - 1.94 \times g - 0.0968 \times LB + 35.373$$

となり、これは「スマイル指数」ともいえるものである。

表2. 真顔時の計測値 (mm)

	a	b	c	f	g
スライド1	24.0	14.3	19.0	3.4	5.4
スライド2	24.2	13.8	17.0	3.2	6.0
スライド3	22.8	13.6	19.6	4.0	5.0
スライド4	25.0	14.0	16.0	3.7	7.0
スライド5	25.5	14.4	16.0	3.8	7.6
スライド6	26.0	14.6	17.0	4.0	5.7
スライド7	25.0	14.0	17.6	2.2	5.5
スライド8	23.4	15.3	18.6	3.5	4.9
スライド9	23.0	13.4	18.3	3.0	5.3
スライド10	23.4	13.0	17.7	3.6	5.5
スライド11	24.0	14.0	16.2	4.0	5.5
スライド12	23.5	13.8	17.5	3.7	5.5
スライド13	25.7	16.4	18.5	3.5	5.5
平均	24.3	14.2	17.6	3.5	5.7

表3. スマイル時の計測値 (mm)

	a	b	c	d	e	f	g	h	i
スライド1	21.2 ↘2.8	17.0 ↗2.7	25.7 ↗6.7	5.0	1.5	1.5 ↘1.9	3.5 ↘1.9	0	5.0
スライド2	21.4 ↘2.8	17.0 ↗3.2	25.5 ↗8.5	6.0	0	3.0 ↘0.2	4.5 ↘1.5	0	6.0
スライド3	21.0 ↘1.8	15.2 ↗1.6	25.0 ↗5.4	4.5	1.5	3.5 ↘0.5	4.5 ↘0.5	2.0	3.0
スライド4	22.9 ↘2.1	15.7 ↗1.7	22.4 ↗6.4	6.0	2	3.2 ↘0.5	4.5 ↘2.5	1.7	4.6
スライド5	24.5 ↘1.0	17.4 ↗3.0	26.0 ↗10.0	6.5	1.4	3.6 ↘0.2	5.5 ↘2.1	1.7	5.0
スライド6	24.0 ↘2.0	15.0 ↗0.4	23.4 ↗6.4	3.0	3	2.6 ↘1.4	4.5 ↘1.2	0	3.8
スライド7	24.0 ↘1.0	15.2 ↗1.2	24.0 ↗6.4	5.5	0	1.5 ↘0.7	3.3 ↘2.2	1.5	4.3
スライド8	22.0 ↘1.4	17.0 ↗1.7	25.8 ↗7.2	5.0	2.5	3.0 ↘0.5	3.7 ↘1.2	1.0	4.2
スライド9	22.7 ↘0.3	14.0 ↗0.6	20.8 ↗2.5	2.0	0	3.0 0	5.0 ↘0.3	0	2.0
スライド10	20.7 ↘2.7	15.0 ↗2.0	23.4 ↗5.7	5.0	1.5	2.9 ↘0.3	4.9 ↘0.6	1.5	4.0
スライド11	21.4 ↘2.6	15.5 ↗1.5	25.0 ↗8.8	5.0	2.5	3.5 ↘0.5	4.0 ↘1.6	1.5	3.9
スライド12	22.3 ↘1.2	15.3 ↗1.5	22.4 ↗4.9	4.0	2.5	3.5 ↘0.2	4.9 ↘0.6	0	3.5
スライド13	23.5 ↘2.2	18.0 ↗1.6	22.3 ↗3.8	5.7	1.5	3.0 ↘0.5	4.0 ↘1.5	2.0	4.1
平均	22.4	15.9	24.0	4.9	1.5	2.9	4.4	1.0	4.1
増減の平均値	↘1.8	↗1.7	↗6.7			↘0.6	↘1.4		

↗は真顔時よりもスマイル時に増加、↘は真顔時よりもスマイル時に減少を示す。

表4. 色の測定値 (R:赤 G:緑 B:青)

歯	R	G	B
スライド1	233	220	201
スライド2	234	226	205
スライド3	229	216	197
スライド4	226	205	178
スライド5	229	200	168
スライド6	237	223	214
スライド7	242	223	208
スライド8	230	212	200
スライド9	204	171	166
スライド10	232	210	196
スライド11	225	195	171
スライド12	225	196	164
スライド13	238	210	186
平均	230	208	189

肌	R	G	B
スライド1	187	138	105
スライド2	188	150	131
スライド3	200	154	104
スライド4	204	145	113
スライド5	197	148	118
スライド6	202	122	99
スライド7	202	150	136
スライド8	177	123	97
スライド9	192	146	122
スライド10	160	125	97
スライド11	163	116	72
スライド12	193	135	95
スライド13	174	120	82
平均	188	136	105

唇	R	G	B
スライド1	223	122	100
スライド2	229	139	113
スライド3	232	136	124
スライド4	223	134	126
スライド5	227	114	98
スライド6	217	122	116
スライド7	230	138	123
スライド8	218	119	113
スライド9	231	117	125
スライド10	225	114	105
スライド11	213	110	79
スライド12	222	126	110
スライド13	212	109	94
平均	223	123	110

表 5. スマイル指数

スライド1	40.775	スライド8	38.501
スライド2	37.044	スライド9	25.766
スライド3	35.542	スライド10	34.728
スライド4	29.113	スライド11	40.469
スライド5	33.126	スライド12	30.483
スライド6	30.659	スライド13	32.418
スライド7	33.313	平均	33.995

a, gに関しては、小さいほど、cに関しては大きいほど笑顔に対して高評価を与える(表2)。また、LB(赤唇Lの青色B)に関しては、赤唇の色の中で、青味が少ないほど笑顔の評価が高かった(表4)。その結果、aはスライド3、gはスライド1、cはスライド5、LBはスライド11がそれぞれ最も評価が良かった。

上述した式に計測値を代入して計算してえられたYの値(スマイル指数)を表5に示す。アンケート結果において、最も好感度が高いと示されたスライド11とスライド1とが入れ替わっているが、その差はわずかである。

考 察

1. アンケートの評価結果について

今回、それぞれのグループで平均値は多少の違いはあるものの、好感度なスマイルはほぼ同じ結果となった。グループ1、グループ2、グループ3ともに最も好感度なスマイルは、スライド11で、どのグループも40点以上であった。続いて、グループ1、3ではスライド1、スライド2の順となった。グループ2では、スライド2、スライド1の順位となり、スライド1、2共に35点以上であった。このことから、好感度なスマイルは、歯科衛生士の資格があるか、ないか(歯科衛生士と一般人)に関わらず差はないと考える。何人かの写真を見て、その魅力度を評定する実験⁶⁾において、人々の評価の仕方がきわめて類似していて、かなり一貫した基準で評定している。この一貫した基準はすでに幼い頃から身につけているという。本研究の実験結果も合致している。

一番評価が低かったものは、どのグループともスライド9であった。しかし、スライド9は、本来の自然なスマイルではなく苦笑いのようなスマイルに感じられ、このような結果となったと考える。

2番目に評価が低かった、グループ1ではスライド6、グループ2、3ではスライド12について見てみることにした。スライド6は、口角が左右均等に上がっておらず、ひきつった口元のように感じられ

る。心理学的研究によると、人間は左右対称性の高い人ほど異性に好まれるという実験結果が得られている。左右対称に関する多くの研究結果^{6,7)}から「人間は左右のシンメトリーを検索して釣り合っているものを心地よく感じるように遺伝的にインプットされているのであろう」との仮説を提唱している。また、石井他による研究⁸⁾では、口裂線(上唇と下唇との間)を傾斜させたもので「やや違和感がある」あるいは「違和感がある」を選択する回答者が多い傾向を示した。なお、この回答者の半数が歯科医であった。本研究のグループ1についても歯科医療従事者(歯科衛生士)である。心理学的に口元に違和感を感じ、さらに、職業的にも少なからず違和感を感じたため、評価が低くなったと考える。

スライド12では、特に眉毛に違和感を感じるためにこのような結果となったのであろう。眉毛の描き方一つでも顔全体の印象が変わってしまうことがありうるということがわかる。

有意差があったスライド7については、グループ1で平均値が最も低かった。アンケート前に、スライドから最初に感じた印象そのままを評価するよう言ったが、この学生に日常よく接しているのは、グループ1である。そのため、この学生の本来のスマイルを知っていると思われる。いつものスマイルとスライドの写真に少し違和感があったため、このような結果となったと推測する。

グループ1では、顔の印象以外にも学生の特性や職業上の問題がアンケートの評価に影響していると考えれば、グループ2、3の評価の結果を参考にして、好まれているスマイルがどのようなものかが分かるように思う。ただし、どのグループにおいても好まれているスマイルは、スライド11であった。

グループ1の附属歯科診療所の歯科衛生士と歯科衛生士学科教員と歯科衛生士学科専攻科のアンケート結果を比較してみると、附属歯科診療所の歯科衛生士が一番点数が低かった。これは、常に患者と接しており、患者に安心感を与えるような、よりよいコミュニケーションを求められているために、厳しい評価となったと考える。

評価者の中で、一般人として、歯科衛生士学科1年生を選んだことに対して、歯科関係者ではない、一般人といえるかという指摘があるかもしれないが、1年生は入学直後であり、受講している講義のほとんどは一般教養科目であって、歯科関係講義はまだ開始されていない時期であり、観察したところ、

顔に関する関心度は一般人と同等と考えて評価者を選んだ。

2. 評価要素について

計測項目において、aの口角の高さ、gの鼻と上唇間距離が小さく、cの口角間距離が大きいと高評価を与えるということから、主に口元を意識してスマイルすると好感度なスマイルができると考える。口角の高さが小さくなるということは、口角を上げるということになる。口角が上がれば自然に口角間距離も大きくなるし、上唇も引っ張られるため、鼻と上唇間距離も自然に小さくなる。このことから、口元、特に口角を上げるように意識してスマイルをすると好感が持てるスマイルを作ることができると考える。スマイル・エクササイズ⁸⁾という顔の体操においても、笑顔の美しさを表現するための練習法で、この訓練を続けていくと口角が左右均等に引き上げられたきれいな笑顔を作ることができる。

その他の計測項目を見てみると、スマイルによってbの鼻翼間の距離が平均で1.7mm増加する。スマイルの美しさを決める潜在的要素と言われている⁹⁾eは、平均で1.5mmであった。本研究では、空隙がない人も数人いたことと、評価に影響する因子でもなかったため、スマイルを決める要素としては、影響はないように考える。

「目は口ほどにものをいう」¹⁰⁾という言葉がある。感情を言葉で語ると同じように、またそれ以上に目元に表れるということであるが、測定項目fの目の高さのスマイル時の平均は、0.6mmとなった。すべてのスライドで真顔時と比較して減少した。作り笑顔というのは、いくら口元が笑っていたとしても、目は笑っていないように感じられる。もし、本当の心からのスマイル写真と作り笑顔の写真とを並べた時、目を見て判断しているであろうと推測する。本研究では、評価に影響する因子としてはあげられなかったが、口元と同じように笑顔の評価に影響してくると考える^{11, 12, 13)}。

hの上顎切歯切端から下唇までの距離とiの上顎切歯切端から上唇までの距離を比較して考えると、どのスライドもiの方が大きかった。結果から、口角が上がった方が高評価を与えるので、hの数値が大きくなってしまふと、口角も下がってしまい、評価が低いスマイルということになる。また、iについて、最も好感度なスマイルを示したスライド11では、スマイル時には上顎切歯が上唇に対して3.9mm（実長は $3.9\text{mm} \times 100/51 = 7.65\text{mm}$ ）現れている。これは、

中切歯の歯冠長の平均値10.5mmより3mmほど小さい。

顔の笑顔に関係するものとして、表情筋、口輪筋の働きが考えられる。このことについては、十分に考慮したが、笑顔の評価を行う段階ではこれらの筋について配慮しながら評価することはないと考えて考察は行わなかった。ただし、好感度の笑顔、美しい笑顔などを導き出すためのトレーニングにおいては、これらの筋を考慮しながら行っているであろう。

現代では、歯の白さと共に、口元の美のポイントとなっているのが口唇である。化粧は、赤、白、黒の三原色が基本になって成り立っていると言われて⁹⁾いる。赤はもちろん口紅であるが、この三原色の中で原点となっているのが赤である。¹⁰⁾なぜ赤なのかは、身近にある色の中で、赤はただそれだけできれいだと思うし、周りを華やかにする。そのため、美の対象としたのではないかと考える。逆に赤が薄かったり、青白かったりすると華やかさは消え、不健康そうに見えてしまったりする。今回、Photoshopを用いて赤、緑、青についてそれぞれ計測したが、青が少ない方に高評価が得られる結果となった。緑よりも青の方が赤に与える影響が大きいことから、このような結果となったと考える。青い色の数値が一番小さいのがスライド11である。アンケートの評価でも、スライド11が3グループとも好感度は1位であった。口元の形はスマイルの印象に大きく関わると予想はしていたが、色も評価に大きく影響してくることがわかった。

スマイル時と真顔時の変化については、数mm増加する、減少するだけで顔の印象が大きく変わることが分かり、人は他人の顔のわずかな変化をとらえて評価しているといえる。

他人には、スライド11のようなスマイルに好感が持てることになるが、私は、口元が大きく開いたスマイルが好みであるし、私自身このようなスマイルをするので、スライド5のようなスマイルに好感が持てる。本研究では、アンケートによりスライド11が最も好感が持てるスマイルとなっているが、人によってスマイルの印象の受け方は様々であるので、好みによって、違いが出てきってしまうと考える。

今回、Photoshopを用いて色の計測をおこなったが、本来の被験者の色ではなく、パソコン上の色となっている。アンケートをPower Pointを用いて行ったため、パソコン上での計測とした。しかし、規格を定め、写真を使用し、専用の器械を使用して

計測すればもっと正確な数値が出たのではないかと考える。

被験者にとっては、初めての経験である規格写真撮影装置上で撮影したために、普段友人と話している時のような自然なスマイルよりは、カメラの前で指示して行ったため、本来のスマイルではないものもあったと思われる。このことは今後の課題である。

結 論

本研究は、他者から見た好感度なスマイルはどのようなスマイルなのか。また、歯科衛生士と一般人との間で有意差はあるのかを検討することを目的とした。

好感度のスマイルは、口元については、口角が上がり、口が大きく開いた形で、色については、口唇の色では青色の少ない赤の方が好感を持てる結果となった。

一元配置分散分析において、1枚のスライドに対してグループ間で有意差があったが、他のスライドについては、3グループ間で有意差は認められなかった。

表情は、自分の思いを言葉と共に伝え、言葉以上に伝わるものである。表情は無理に作ろうとするものではない。不自然なスマイルは相手に誤解を招いてしまう場合もある。素直な気持ちを表情に出し、自分らしいスマイルを心がけていけば、良好な対人関係を築いていけると考える。

謝 辞

顔面写真からのトレース製作に協力いただいた、明倫短期大学事務局の内野加奈子さんに感謝します。

文 献

- 1) 竹内一郎：人は見た目が9割。18, 新潮社, 東京, 2005
- 2) 船木純三：日本人のスマイル: KAZESAYAGE 66. 6-7, 風人社, 東京, 2001
- 3) 寺田員人, 山崎幸一, 松原大樹, 他：歯科矯正治療前後の平均顔の特徴. 美術解剖学雑誌 9: 11-22, 2005
- 4) 花田晃治：審美性の客観的評価を求めて－外科的矯正治療における美の基準とは－. 別冊ザ・クインテッセンス デンタルエステティック－顔貌を考える－. 116-133, クインテッセンス出版, 東京, 1992
- 5) Abe Y, Haebara T and Hanada K: An index for objective evaluation of the soft tissue profile. Int J adult orthodontics and orthognathic surgery 5: 249 -254, 1990
- 6) 柳澤桂子：左右を決める遺伝子. 119-135, 177-193, 講談社, 東京, 1997
- 7) Kleinke CL, et al.: FIRST IMPRESSIONS. 榎本博明, 塩崎万理 (訳) ファースト・インプレッション (容貌がすべてではないが). 1-32. 有斐閣, 東京, 1984
- 8) 石井一裕, 八巻正樹, 斎藤 功, 花田晃治：WWW上で行った横顔の好み, および非対称顔貌に対する印象の調査について. 伊藤学而, 花田晃治 (編): 臨床家のための矯正Year Book'98. 203-210, クインテッセンス出版, 東京, 1998
- 9) 村上由見子：日本人若年成人女子における Posed smileの審美性について. 松本歯学34: 48-63, 2008
- 10) 成田令博：人にとって顔とは. 第1版, 口腔保健協会, 東京, 1995
- 11) 寺田員人, 花田晃治：歯科矯正治療による正面顔の変化に関する研究. 美術解剖雑誌 2: 29-35, 1998
- 12) 寺田員人, 吉田 満, 佐野奈都貴, 他: コンピュータグラフィックスを用いた矯正治療後の表現認知. 顎顔面バイオメカニクス学会誌14: 1-13, 2008
- 13) 寺田員人, 宮永美知代, 森嶋繁生, 他: コンピュータグラフィックスを用いた矯正治療による表情の変化. 歯科審美 12: 37-51, 1999